

## 【論 文】

## 人間回復の場としての博物館

— 現代社会に希求される博物館像を求めて —

The Museum as a Site for Restoration of Humanity:  
Searching for the Museum that Modern Society Demands

森屋 雅幸\*

MORIYA Masayuki

## 【要旨】

本稿では、博物館法改正の議論で現れた現代社会に希求される博物館像を伊藤寿朗の「地域博物館」論まで遡り、この博物館像が消費社会における「近代的個人」の登場を背景として、人間回復の場を志向していた可能性を明らかにした。こうした場こそが現代社会に希求される博物館像であると筆者は捉えた。本稿では続いて、現代の経済合理性にもとづく博物館運営の転換の契機、そして人間回復の場としての博物館像の実態の手がかりをルチャ・リブプロの活動と理念から検討した。この結果、「参加・体験」という博物館活動は、代替不可能である「個人的な体験」を蓄積する機会となり、当事者が博物館ひいては地域と自身を「かけがえのない」ものとして受容する、いわば人間回復の契機を含むと考察した。

キーワード：地域博物館、自己形成空間、アジュール、人間回復

## はじめに

2019（令和元）年から、文化審議会博物館部会において博物館法改正に向けた議論が開始された。この議論の中で、博物館の役割について、博物館が市民参画や協働を通し、地域とのコミュニケーションを図る場になってきているなど、人々が博物館に求める機能も多様化、かつ高度化している現状が報告されている<sup>(1)</sup>。また、博物館に求められる役割として（1）交流・対話の場、（2）健康・幸福、生活の質への貢献、（3）社会包摂・社会統合への寄与、（4）地域の創生、活性化の貢献、（5）社会課題への対応、（6）持続可能な未来の実現の6点が提起された<sup>(2)</sup>。こうした博物館の役割は、資料の収集・保管・展示・調査研究といった枠組みを超えたものとして捉えることができ、現代の博物館の役割に求められた課題であるともいえ、現代社会に希求される博

\* 立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科兼任講師

博物館像と捉えられる。本稿ではこうした博物館像と、この実現に向けた糸口を明らかにすることを目的とする。

とくに「人々が博物館に求める機能も多様化、かつ高度化している」現状は、例えば、後述するように、従来の博物館の機能とされたものと異なる機能として、戸田孝が「副次的機能」(戸田 2017)と表現するものと一致すると筆者は考える。そこで、本稿では現代社会に希求される博物館像についてまずは、これを実現させる可能性をもつ「副次的機能」の研究を手掛かりにその実態と問題意識を明らかにする。

## 1. 先行研究と研究方法

戸田(2017)は事例分析を通して、博物館の「副次的機能」は「研究対象が持つ力を紹介する機能」「研究成果を提供し、研究成果を共に考える機能」「研究過程や研究成果を共有するための場を提供する機能」の3種の本来機能から派生すると論じ、具体的に「住民が集う場を提供する機能」「『居場所』を提供する機能」「『安心・安全』を提供する機能」「人と触れ合う機能」「『元気に活動させる』機能」「『いきいきとさせる』機能」「研究対象が持つ力を発揮させる機能」の7つの機能とそこから派生する「博物館機能から派生する『癒し』機能」を系統的に提示した。これら機能を「副次的機能」として、加藤有次が提起する「博物館機能論」(加藤 1977、1996)で整理された第1次機能(資料収集・整理保管・調査研究)、第2次機能(展示・教育普及)の外側に位置付けた。

このように先行研究では、「副次的機能」の実態を明らかにし、「博物館機能論」を基盤として、博物館学上に「副次的機能」を位置付けることが試みられている。「副次的機能」は、上記の博物館部会が示した6点の博物館の役割と重なり合うものとして捉えられ、現代の博物館に求められる機能面を表現したものといえる。

「副次的機能」は、現在、議論される理想的な博物館を実現させるための要とも捉えられるが、戸田は博物館業界では、博物館学上の位置付けを明確にするどころか、異端視する傾向があったと振り返る(戸田 2017: 2)。また一方で、近年財政が逼迫する中で博物館に対する批判に対し、設置者が施設稼働率を高めるため、博物館の事業としての妥当性を検討することなく、「副次的機能」にあたる事業が推進される現状を報告する(同上)。こうした事情から戸田は「事業の是非を確実に判断するためには、その事業の『博物館学上の位置付け』が確立されていることが必要である。」(同上)と論じる。つまり、博物館学上の位置付けの課題と現状の経済合理性にもとづく博物館運営の在り方という2つの問題意識から「副次的機能」が提起されたことがわかる。これら問題意識に向き合うことは、現代社会に希求される博物館像を実現させる糸口につながると筆者は考える。

ところで、戦後の博物館学が1次機能、第2次機能といった博物館の内的機能のみに着眼し、博物館と社会の関わりが捨象されたことに対して、機能主義博物館論批判をおこなったのが、伊藤寿朗である。伊藤は戦後の博物館理論を主導してきた機能主義的方法に対し、歴史主義的方法を提起するが(伊藤 1978: 199-200)、このことに対し、白井哲哉は「伊藤は自らに両者を止揚する新たな博物館理論の構築を課したので

あり、『地域博物館論』こそはその成果だった」（白井 1997：15）と評価する。つまり、伊藤の「地域博物館」論は内的機能と異なる「副次的機能」を包摂した理論を展開していた可能性をもつと筆者は考える。先行研究は「副次的機能」について、博物館機能の観点から博物館学上の位置付けを試みているが、本稿では、伊藤寿朗の博物館論から、博物館学史上の位置付けを試みて、先行研究のひとつ目の問題意識に迫る。なお、研究方法は文献研究を基本とする。

## 2. 「地域博物館」論の博物館関係者への受容

伊藤寿朗は、博物館運営の軸は時代によって変化しているとし、「保存」を運営の軸とした第一世代、「公開」を運営の軸とした第二世代、「参加・体験」を運営の軸とした第三世代と表現した（伊藤 1986：241）。そして、「第三世代の博物館」について、「第三世代とは期待概念であり、典型となる博物館はまだない。」（同上）と捉えた。なお、伊藤は「第三世代の博物館」像について、活動内容の質的变化を時系列で捉えることにより、新しい博物館の方向性とそのために必要な条件を提示する考え方とし、これに対し、博物館を並行軸で、目的の相違によって区分し、地域志向型（以下、「地域博物館」）、中央志向型、観光志向型と、それぞれ固有のあり方を示そうという考え方を「地域博物館」論とした（伊藤 1987：10）。本稿では、「第三世代の博物館」像も含めて「地域博物館」論と呼称する。

白井哲哉によれば、伊藤の「地域博物館」論はその後、博物館活動への市民参加の積極的な論議を生み、ここから、一部の論者から「限りなく公民館に近い博物館」への志向が出され、博物館関係者の共感を得たとされる（白井 1997：15）。また、この議論は博物館資料の収集・保存・展示を中心とする博物館運営に対し、各種講座を中心とする普及啓発事業へ比重を移すよう求めるものと捉えられている（同上）。ただ、先述の戸田（2017）の指摘のように博物館業界では必ずしもこの議論は受容されなかった一面もあったと考えられる。しかし白井が、1990（平成2）年に制定された生涯学習振興整備法により、この基本理念である民間資本の導入を前提に従来の「教育」の枠を外していく学習機会の拡大化が進み、博物館に関しては、そのテーマパーク化と事業のイベント化の進行が同じ頃に顕在化していると指摘するように（同上：13）、普及啓発事業へ博物館運営の比重を移すことは、こうした法律の施行を背景に学習機会の拡大化として、促進されたことが推察される。近年、新藤浩伸が「ミュージアムをひらかれたものに。（中略）ミュージアムを論じるとき、そのほとんどはこの種の主張へと落ち着いていく。（中略）しかし、商業主義への過度な接近や低予算でできる教育プログラム頼みの事業の展開など、その主張を無批判に繰り返すことで、ミュージアムのあり方がむしろ『ひらく』ことのみをめざすあまり、そのミッションを見失っている状況も、一画あるのではないか。」（新藤 2016：232）と指摘するように、こうした傾向は現在も続いているといえる。ここから、伊藤の「地域博物館」論における市民の「参加・体験」のみが切り取られ、博物館関係者に受容され、普及啓発事業へ運営の比重を移すという、単純な解釈にもとづく博物館運営に結びついた可能性が考察される。こうした背景に関して、加藤幸治は「（前略）地域博物館の存在意義を声高に訴

えても、その主張は必ずしも市民の心に届いておらず、対費用効果や入館者数に偏重した事業評価などの議論のなかで雲散霧消してしまうのが現状である。」(加藤 2012 : 141) と博物館が置かれた現状を報告するように、とくに公設館においては、「副次的機能」にあたる事業の展開は、その質や内容を問わず、対費用効果という行財政上の説明責任を果たすのに都合がいいといえる。

このように、博物館の「副次的機能」の提起は、端的な「地域博物館」論の博物館関係者の受容と近年の博物館をめぐる行財政上の都合が、契機になっている可能性があり、「地域博物館」論をめぐる議論の延長上に位置付けることができる。この議論については、新藤(2016)が現代における博物館の「ミッション」の喪失を指摘するよう、「地域博物館」論における「参加・体験」という手段のみが切り取られ、この手段が何を目的としたのかまでは博物館関係者に受容されていない可能性がある。そこで、一部が切り取られ、現代の博物館運営に受容された可能性のある伊藤の「地域博物館」論を参照し、この博物館像が何を目標としたのかという点を次に明らかにする。

### 3. コンテキストの復権と「消費社会の博物館」論

伊藤は、「地域博物館は、博物館のもつ機能を通してコンテキストの復権をめざしている。」(伊藤 1987 : 14) と論じる。コンテキストとは、「文脈」や「背景」の意味をもち、この復権を「地域博物館」の目標と捉える。コンテキストの復権の必要性に関わる説明は、「消費社会の博物館」論という章に以下の一文が確認できる。

六〇年代末以降、二〇年間における博物館の急激な変容は、博物館内部の理由から説明することはできない。余暇の増大、高学歴化など、さまざまな要因は考えられるが、基本は、“消費社会”という新しい社会のスタイル、人々の意識変化の反映とみるべきだろう。現代社会を構成している個々人は、自己存在への漠然とした不安に直面している。それは経済的不安、老後への不安という直接的なものではない。一人ひとりが、自ら「近代的個人」としての自立を急速に進めながら、しかし同時に、それは「家族の解体」に代表される、コンテキストの喪失を意識させるという、孤立と個別化への不安であるともいえよう。こうした、社会の深部における秩序の変容のなかで、公共的価値をもつ社会的な施設として、現代に生きる博物館には、どのような役割と課題が求められているのか。(同上 : 14-15)

伊藤はコンテキストの喪失による「近代的個人」とその孤立と個別化に対し、現代の博物館における役割と課題を見据えて、コンテキストの復権を目標とした「地域博物館」論を展開したことがわかる。神島二郎は日本の高度経済成長期に、都市で労働すべく地方から移住した生活者は、地域共同体から解放されたことにより個人が原子化され、「ハダカの孤人化」(神島 1990 : 86)を引き起こしたと論じたが、伊藤の「近代的個人」は神島のいう「ハダカの孤人」に一致するものと筆者は捉える。ここから、伊藤の博物館論は高度経済成長を経て明らかになった、人間疎外という社会の病理と向き合うために構築された側面があると筆者は考える。また、伊藤は「第三世代の博



物館（地域博物館）」を期待概念としているが、それが社会に果たすべき役割としての期待が「消費社会の博物館」論には込められていると捉えられる。

ところで、伊藤は「地域博物館」の役割について「地域博物館は、そうした、地域に生活する市民自身の自己学習能力を刺激し、育くみ、自分で自分の学習を発展させていく力量（自己教育力）の形成を図ることを課題としている。地域の課題に、博物館の機能を通して、市民とともに応えていこうというのが地域博物館である。」（伊藤 1987：12）とし、「地域博物館」は、市民の自己学習能力を育み、地域課題にともに応えていくことにあるとも論じる。この自己学習能力に関して、伊藤は「地域博物館が、市民の自己教育力の形成を図るということは、地域に生活する市民に必要な力量とは何かという、基本となる教育観の問題につきあたる。」（同上：13）とした上で、知識者養成型、生活者養成型という2つの近代的教育観を示す。伊藤は生活者養成型の教育観について「“教育”という言葉は使われないが、『一人前』といわれているように、人々の間で営々としてつちかわれてきた、人間育成の技である。自らの表現によって生活を築いていく、『生活を自らきり開くことのできる資質をもった人間』の育成を目標とした教育観である。」（同上）とし、「地域博物館」はこの生活者養成型の教育観に対応していると論じる。このように伊藤は喪失したコンテクストを地域博物館への「参加・体験」から復権させ、「近代的個人」を「生活者」として育むことを「地域博物館」に期待していたことが考察できる。つまり、人間回復の場としての博物館像を「地域博物館」に期待していた可能性があるとは筆者は考える。そして、こうした博物館像が現代社会に希求されている可能性が考察される。この点をより明確にするため、以下では引き続き「消費社会の博物館」論で論じられた「地域博物館」の中身を確認する。

博物館という公共的機関に求められるのは、孤独な、そして個別化された市民を、客体として固定化することではないだろう。それは受け身の参加から、自らの“場”をみなおしていくということである。（中略）それは、カルチャーセンターにみられるように、何かが用意され、待ちかまえている場ではない。平林正夫は、国立公民館における経験をとうして、“たまり場”という、学校でもない、家庭でもない、教育の中間項のもつ積極的意味を、「空間」のもつ大切さとして提起している。（中略）出会い ↔ 気づき ↔ 学び ↔ 交流の連鎖のなかで、何か目的をもち、活動をはじめるための場づくり、「自己形成空間」のもつ重要性は博物館も同様である。（中略）

消費社会という、受け身の社会の進行とともに、博物館は急激に発展してきたといえよう。孤独な、そして個別化された市民にとって、博物館、とりわけ美術館、動物園、植物園などは、アジール（避難空間）としての機能をもっていることは否定できない。博物館が、産業社会の効率という原理とは、別のものを軸としていることの反映でもあるだろう。そして、アジールはまた、現実の社会を相対化していく契機を秘めた、積極的意味を含んだ空間でもある。（同上：16）

「カルチャーセンターにみられるように、何かが用意され、待ちかまえている場ではない。」とあるように「地域博物館」論の提起後に1990年代からみられた博物館のテーマパーク化と事業のイベント化という博物館運営の状況に対して、伊藤は異なる立場

をとっている。そして、来館者が受け身とならない博物館の中身として「自己形成空間」のもつ重要性を訴える。加えて、博物館はアジール（避難空間）としての機能をもつと主張する。これは、文脈からひとときの癒しを求める場としてのニュアンスが含まれていると捉えられるが、後段では「アジールはまた、現実の社会を相対化していく契機を秘めた、積極的意味を含んだ空間」と表現し、アジールに単なる癒しの空間を超えた意味合いを含ませていることがわかる。

以上から、伊藤が博物館に託した役割の具体的な中身として「自己形成空間」「アジール」という要素が重要視されていることが推測される。ただ、この2点については、詳述されていないため、期待概念としての「地域博物館」の具体的な内容を検討するため、2つの要素について、主要な論者の論考から詳細を確認する。まず、「自己形成空間」の内容を確認する。

#### 4. 「自己形成空間」とアジールとしての博物館

「自己形成空間」は教育学者の高橋勝による造語である<sup>(3)</sup>。高橋は「自己形成空間」を「子どもが、自然、他者、事物と関わり合う場所。相互的かつ受苦的な経験が生じる場所。『古い自己』が解体して、『新しい自己』が再精する場所」（高橋 2011：24）と捉える。この概念の提起には、個人が生まれ育った郷土、自然、地域コミュニティなどから引き離され、アトム（原子）化した個体としてこのグローバル社会に投げ出され、また地縁・血縁集団といった〈関係〉から解き放たれた個人が、庇護する集団を失い、全責任を背負わされた個体として、子どもが生きざるを得ないことが問題意識として確認できる（同上：7）。

高橋の論じる「自己形成空間」は子どもを前提としているが、高橋の定義は伊藤が「何かが用意され、待ちかまえている場」でなく、「出合い ↔ 気づき ↔ 学び ↔ 交流の連鎖のなかで、何か目的をもち、活動をはじめるための場」という他者を前提とした学びの場として「自己形成空間」を捉えていることと符合する。また、高橋は伊藤のいう「自己形成空間」における「交流」にあたる部分について「それは、学校のような〈教師・生徒〉関係、家族のような〈母子・父子〉関係が優先される場所ではない。〈教師・生徒〉関係、〈親・子〉関係のようなタテ関係ではなく、仲間同士のヨコ関係や、地域の大人たちとの関係、他者との関係、他者との出会いのように、ナナメの関係や新しい他者関係が生じる場所である。」（同上：25）と詳述する。つまり、日常生活にある家庭、学校生活での交流とはまた別の多世代による交流を「自己形成空間」が内包していることがわかる。そして「自己形成空間」の必要性は、全責任を背負わされた「アトム（原子）化した個体」「地縁・血縁集団といった〈関係〉から解き放たれた個人」が生きざるを得ないという現代社会に立脚しており、伊藤が「近代的個人」が喪失したコンテクストを復権させることを博物館の目標とすることに符合した問題意識といえる。また、高橋は「自己形成空間」は、ノン・フォーマルな場所で、他者と応答できる小さなコミュニティであることも論じる（同上：37）。伊藤の博物館観に現れる「自己形成空間」も高橋が論じるように博物館で生成された市民のコミュニティとそこでの交流を想定していた可能性を筆者は推察する。次に日本のアジール論につい

て確認する。

日本のアジールについて、夏目琢史は、この言葉に脚光を浴びせ、その流行の起点となったのは、1970 年代に網野善彦が発表した『無縁・公界・楽』と述べる（夏目 2009：8）。そこで、本稿では網野善彦の言説からアジールの中身を検討する。網野は中世日本に存在した「無縁」からアジールの実態を論じた。網野によれば、「無縁」に規定された場や人（集団）の特質について、主従関係、親族関係等々の世俗との縁が切れている点にみる（網野 1996：110）。そして網野は、場や人（集団）を「無縁」とする「無縁」の原理について、専制的支配の原理に拮抗するものであり、「解放」を保障する「自由」の原理であるとする（同上：38-39）。また、アジールとしての「無縁」は戦国大名すなわち「有主」「有縁」の中に取り込まれていくことで消滅すると論じるが、その根底にある原理自体は現代に残っていると主張する（同上：246）。

なお、「無縁」について花田達朗は、公共圏と「無縁」について発生原点の相違はあるものの、「ハーバーマスの市民的公共圏論と網野の『無縁・公界・楽』論の間には、後者には歴史的過程の複雑性が付きまとうものの、動機と論理において確かにある種の親近性が認められることは興味深い事実として指摘しておきたい。」（花田 2009：76）と、両者の相似性を論じている。つまり、「無縁」はひとときの癒しを求める場ではなく、伊藤がアジールを「現実の社会を相対化していく契機を秘めた、積極的意味を含んだ空間」と表現するように、ここには、国家や市場原理から自律した公共圏としての意味合いを含んでいた可能性を筆者は推察する。

「自己形成空間」とアジールは空間と人間の関係性を表現する点で共通するが、とくに前者は日本のポスト近代によって変容した社会に対する問題意識から提起された概念であり、対社会的な意味合いが含まれている。ただ、それはアジールも「無縁」と公共圏の親近性に着目すると、同様に対社会的な側面があることも明らかである。両者の対社会的な側面を合わせて伊藤の博物館観を改めて検討すると、伊藤の博物館観には、現代社会において千々に分断された人と人、人と地域のつながりが博物館への「参加・体験」から生成され、そこで生成されたコミュニティが地域課題へ向き合うことを通し、コミュニティの成員が「生活者」として自己形成していく契機の間として期待が込められていると筆者は考える。こうした博物館観には、上述のとおり、人間回復の間としての博物館への期待が込められているともいえる。

以下では、先行研究で確認したもうひとつの問題意識である経済合理性にもとづく博物館運営の在り方を思考しながら、人間回復をテーマとした地域における実践活動を事例に、こうした博物館観の実態と実現の手がかりを明かにしたい。

## 5. 人間回復の間としての博物館への手がかり

本稿の3章で引用した加藤幸治による経済合理性にもとづく博物館運営の現状報告に対し、青木真兵は「『博物館の存在意義』が社会全体に共有されていないと感じる方は多いのではないのでしょうか。私もその一人です。現代社会では、文化、教育といった、結果が出るまでの変化が緩やかだったり、そもそも数値化とは馴染まない事柄に対しても、『対費用効果や入館者数』によって成果をカウントしている傾向が強化され

ています。」(青木 2021a: 8) と述べ、自身が 2016 (平成 28) 年に移住先の奈良県東吉野村で自宅に開いた私設図書館 (人文系私設図書館 Lucha Libro、以下ルチャ・リブロ) の活動から「公共とは何か」について思考する。この中で青木は、2000 年代後半以降の大阪府の新自由主義的政策による大阪人権博物館への実質上の立ち退き要求などに触れて次のことを述べている。

(前略) これらの政策が支持された背景には、公共財が自分たちのものではなく、「誰かのもの」だと府民や市民が思っていたということがあるのだと思います。「誰かのもの」であるものの価値を測るためには、最も万能な価値尺度は商品としての価値です。だから、商品としての価値がなければなくしても良いという乱暴な論理がまかりとるのです。しかし商品としての価値があるどうかで、公共財の価値を判断してしまうことはとても危険です。

そういう意味で、私たちの図書館活動は「公共」を問い直す試みです。問題意識の根底には、私たちはどうすれば公共を自分ごととして扱うことができるのか、というものがあります。そのためには「公共」のなかに、商品としての価値だけではなく、「交換できない価値」を含むことが必要なのではないのでしょうか。(中略) 公共を「誰かのもの」だと思わずに、自分もその担い手だと思うこと。そういう人が一人でも多く増えることが、博物館の存在意義を社会全体に共有できる唯一の道なのではないかと思っています。(同上: 9)

青木は博物館のような公共財が、自分ごとでなく、他人ごととして捉えられることにより、その存在が商品価値でしかはかられないことの危険性を訴える。同時に「公共」を他人ごとでなく、自分ごととして扱うためには、そこに代替可能な商品価値だけでなく「交換できない価値」を含むことの必要性を論じ、「公共」を問い直す試みとしてルチャ・リブロの活動を位置付ける。つまり、ルチャ・リブロの活動は現代社会において、博物館ひいては「公共」を他人ごとから自分ごとへ転換する実践を含むと捉えられる。

ところで、青木はルチャ・リブロの活動について「僕たち自身、東吉野村へ引っ越して自宅を図書館として開くことで徐々に『回復』し、自分たちの生活を組み立て直している最中である。間違えたから正しい道に戻るといったような意味ではなく、舗装されていなくても自分に合う道を見つけていく過程を『リカバリー』と呼びたい。」(青木他 2020: 84-85) と振り返るが、自身の活動を人間回復の契機として捉えていることがわかる。

なお、ルチャ・リブロの活動は図書館活動であり、博物館活動ではないが、「僕たちは図書館を『サービス』(商品) として提供しているのではないから、本当はルチャ・リブロはみんなが知っている『図書館』ではないのかもしれない。」と自身の活動を捉えることや、伊藤自身が博物館資料と図書資料という絶対的な相違を認めつつ、「地域博物館」論は図書館にも当てはめられることを示唆することから (伊藤 1986: 273)、本稿では、経済合理性によらない博物館運営への転換と人間回復の場としての博物館観の実態の手がかりをルチャ・リブロの活動と理念から明らかにする。



青木はルチャ・リプロの理念に関して「(前略) 現代の価値観が通用しない彼岸だと思っている。(中略) どこかに『現代のロジックが通用しない』 彼岸的な場所があったら、みんな健全に過ごせるんじゃないか。」(青木他 2019: 202) と述べる。こうした理念のもとルチャ・リプロの活動は『彼岸の図書館』として刊行したが、このタイトルのもうひとつの候補は「手づくりのアジール」<sup>(4)</sup>であったといい(青木他 2021: 177)、このアジールに対して青木は「『癒し』の場でもあるけれど、『対抗的公共圏』でもある。」(同上: 199) <sup>(5)</sup> と述べており、青木がルチャ・リプロをアジールとして捉え、かつそこに公共圏としての一面をみていることがわかる。青木はこうした空間理念を基礎として、実践理念としてルチャ・リプロの活動を次のように述べる。

(前略) 商品はすべてお金によって交換可能だから、現代社会はお金によって基礎づけられていると言える。「めんどくさい」地縁、血縁から解き放たれた個人は、経済成長が可能な社会では「自由」を謳歌することができた。しかし現代のように非正規雇用が増え不安定な社会では、ただつながりを喪失した個人があたかも燃料切れで大海に放り出された小船のように「漂流」する事態となっている。(中略) お金に振り回されず、お金の多寡が思考のノイズにならないように。むしろ効果的なお金の使い方を考えたい。そのためには生活の一部に、商品化されない「手作りの世界」を持つことが必要となる。(中略) 手作りした「お金が介在しない世界」は、以前のように地縁、血縁といった不自由ばかりが目についた前近代的つながりではなく、お金の世界とパラレルに共存できる「つながり」を持った「世界」である。つながりを再帰的に取り戻すのだ。再帰的とは、限界や効能を知った上でもう一度そこに戻ることを意味する。この過程を僕は「土着」と呼んでいる。(青木他 2020: 46-48)

青木の思考は消費社会を前提としたもので、ここから、青木のいう「土着」と伊藤のいうコンテクストの復権は通底すると筆者は捉える。さらに青木は、「僕らの場合、移住は『リカバリー』のきっかけだけど、いわゆる『社会復帰』とは異なる。現在の社会システムの中で形成されてきた『自己』を、発展・解消していくプロセス。それこそが『土着』だ。」(同上: 66) と述べるが、つながりを取り戻す「土着」を通して「自己」の発展・解消を目指すことは、他者を想定したものであり、高橋の「自己形成空間」の趣旨や概念提起の背景とある程度一致することがわかる。

ルチャ・リプロの活動は、自らが当事者となり、「図書館」を拠点に「土着」を実践することで喪失したつながりを取り戻していく営為であるから、「消費社会の博物館」論で伊藤が期待した「地域博物館」像と共通項をもち、伊藤の博物館像を「図書館」という形態で実践したものと筆者は捉える。

青木はマルクスが人間を「商品」としてしか見られなくなった社会を「疎外」と定義したことを引き、そこから抜け出すためには「個人的な体験」を積み重ねる必要を述べる(同上: 211-212)。経験と体験について森有正は、「経験と体験というのは別のものであるのではなくて、一つのものである凝固した形をとるときに、それが『体験』で、それがあくまで新しい可能性に向かって開かれている時に『経験』という名前を

私はつけるのです。(中略)たとえば迷信なんか、体験の最も極端なものでしょう。」(森 1970: 100) と両者の違いを論じる。青木のいう「個人的な体験」は森のいう、いわゆる迷信のようなものでなく、新しい可能性に向かって開かれる「経験」に位置付けられるだろう。森はこの「経験」について「経験というものが私自身の意味である。また、一人一人が自分の経験を持っていて、その経験はほかの人の経験と置きかえることができない。」(同上: 49-50) とし、このことから、森のいう「経験」とは代替不可能で私を私たらしめるものといえる。つまり、青木の「個人的な体験」は、青木が現代の博物館運営に接して論じた「交換できない価値」に連なるものと筆者は考える。伊藤の「地域博物館」論の「参加・体験」における「体験」もまた青木の「個人的な体験」であり、森の「経験」の同一線上に位置付けられる可能性をもつ。この仮説から「参加・体験」の中身を改めて捉え直すと、博物館活動に参加して感得した代替不可能な「個人的な体験」の蓄積により、当事者にとって博物館および、その活動が展開される地域は「かけがえのない」場として受容され、この営為から自身が「かけがえのない」存在であることに気付く、いわば人間回復の契機になると筆者は考える。ここに伊藤が論じた「地域博物館」の「参加・体験」の本質があり、対費用効果という経済合理性によらない博物館運営への転換の糸口が含まれていると筆者は捉える。

## おわりに

本稿では、博物館法改正の議論で現れた現代社会に希求される博物館像を実現する可能性をもつ「副次的機能」の研究から、その実態と先行研究の問題意識を明らかにした。その結果、先行研究では、博物館学上の位置付けの課題と現状の経済合理性にもとづく博物館運営の在り方という2つの問題意識があり、本稿ではこの問題意識の解消が現代社会に希求される博物館像を実現させる糸口になると考えた。まず、博物館学上の位置付けについて、「副次的機能」の提起が、伊藤の「地域博物館」論の延長上にあることを確認した。また「地域博物館」論における「参加・体験」が端的に博物館関係者に受容されたことが、その質や内容を問わず「副次的機能」にあたる事業を博物館で促進させ、対費用効果という経済合理性にもとづく博物館運営がこれを助長させている可能性を確認した。この背景には博物館の「ミッション」の喪失がある可能性を検討し、ここから「地域博物館」に託された「ミッション」について伊藤の博物館論から考察し、これが消費社会における「近代的個人」の登場を背景に人間回復の場を目標とした可能性を明らかにした。これが現代社会に希求される博物館像であると筆者は捉えた。

そして、先行研究のもうひとつの問題意識である経済合理性による博物館運営に対し、これを転換する契機と人間回復の場としての博物館像を実現する手がかりをルチャ・リブロの活動と理念から模索した。人間回復の場の糸口として、青木は「個人的な体験」の蓄積を論じるが、これは、青木が現代の博物館運営に接して「交換できない価値」に言及することに連なると筆者は考えた。代替不可能である「個人的な体験」とは、伊藤の「参加・体験」の中身と同一と捉え、ここから、「参加・体験」という営為は、当事者が博物館ひいては地域と自身を「かけがえのない」ものとして受容

する、人間回復の契機を含むと考察した。

ところで、「地域博物館」論が提起されて、40 年近く経過するが、本稿で確認したように近年においても博物館の「副次的機能」が議論されるなど、「地域博物館（第三世代の博物館）」は未だに期待概念であるといえる。この具体的な実現を目的とする研究は、本研究を精緻なものとしながら、今後取り組むことを課題とする。

## ■註

- (1) 法制度の在り方に関するワーキンググループ座長の浜田弘明がまとめた「1. これからの博物館に求められる役割（文化審議会第3期博物館部会〈第1回〉配布資料5）」  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hakubutsukan03/01/pdf/02125101\\_05.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hakubutsukan03/01/pdf/02125101_05.pdf)（2021 年 8 月 30 日閲覧）の内容による。
- (2) 同上。
- (3) 高橋は「自己形成空間」を造語し、1992（平成 4）年刊行の著書で使用したと振り返る（高橋 2011：15）。ただ、伊藤の論の方が 1986（昭和 61）年と先行するため、伊藤が高橋の「自己形成空間」論ではなく、国立公民館の職員であった平林正夫の「たまり場」論から、着想を得たことが推測される。
- (4) 同名の書籍は、2021（令和 3）年 11 月に刊行された（青木 2021b）。
- (5) 青木は、アジールについて古来より世界各地に存在した「時の権力が通用しない場」のこととしたうえで、ルチャ・リプロの活動を交え「あらゆるものが数値化され、その序列に従って資金配分がなされる現代社会を此岸としたときに、『そうでない原理が働く場』として彼岸をイメージしたことは前に述べました。そういう意味で、ほくは彼岸とアジールを同じような意味で使っています。」（青木 2021b：5）と意味付けている。

## ■参考文献

- 青木真兵・青木海青子、2019、『彼岸の図書館—ほくたちの「移住」のかたち—』夕書房
- 青木真兵・青木海青子、2020、『山學ノオト』エイチアンドエスカンパニー
- 青木真兵・青木海青子、2021、『山學ノオト』2、エイチアンドエスカンパニー
- 青木真兵、2021a、「これからの『公共』について—人文系私設図書館 Lucha Libro の活動から—」関西大学博物館編『阡陵』第 83 号、8-9
- 青木真兵、2021b、『手づくりのアジール—「土着の知」が生まれるところ—』晶文社
- 網野善彦、1996、『増補 無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』平凡社
- 伊藤寿朗、1978、「日本博物館発達史」伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』学苑社、82-218
- 伊藤寿朗、1986、「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、233-296
- 伊藤寿朗、1987、「現代博物館考」横浜市総務局調査室編『調査季報』94 号、2-26
- 加藤幸治、2012、「市民のなかの民俗博物館」岩本通弥他編『民俗学の可能性を拓く—『野の学問』とアカデミズム—』青弓社、141-183
- 加藤有次、1977、『博物館学序論』雄山閣
- 加藤有次、1996、『博物館学総論』雄山閣
- 神島二郎、1990、『転換期日本の底流』中央公論社
- 白井哲哉、1997、「転換期における博物館学」明治大学学芸員養成課程編『Museum study』第 8 巻、13-20
- 新藤浩伸、2016、「文化的公共空間としてのミュージアム」中小路久美代他編『触発するミュージアム—文化的公共空間の新たな可能性を求めて—』あいり出版、232-243
- 高橋勝、2011、『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から』東信堂

- 戸田孝、2017、「博物館の『副次的機能論』への序論」全日本博物館学会編『博物館学雑誌』43  
巻、1号、1-17
- 夏目琢史、2009、『アジールの日本史』同成社
- 花田達朗、2009、『公共圏という名の社会空間—公共圏、メディア、市民社会』木鐸社
- 森有正、1970、『生きることと考えること』講談社

〈付記〉本稿は、人文系私設図書館 Lucha Libro のキュレーター青木真兵氏との「アジール研究会」での対話から着想を得た。記して感謝申し上げる。